

●春日部市民文化講座（第 18 回） 「利休の侘茶の継承者、古田織部は何者か」

◆日時：2015 年 12 月 2 日(水) 11 時（ばぼら春日部 4 階会議室）～12 時

■古田織部が生まれた場所・岐阜県多治見近辺

今日は古田織部を中心にして彼の生涯、それは彼が「何者か」ということを探ってまいります。古田織部の出生地は、今の岐阜県の大垣市近辺です。古田織部の家系図は、もう本当に分からないです。完全に古田織部家は断絶していて、家系図も 3 回くらい大きく替えられています。どれが真実なのかが分からないくらい不思議な人です。けれども、この陶器類で名前が呼ばれるのは「織部」だけです。不思議な人なのです。

■古田織部が生まれた時代

古田織部の関係年譜から行くと、1544 年(天正 13)に岐阜県本巣郡本巣町山口で生まれたというのはほぼ間違いないですね。この人は、織田信長に仕え、秀吉に仕え、家康に仕えて、その家康に殺される訳です。でも理由が分かりません。後になってさまざまな理由付けがされていますけれども、本来何で家康が彼を殺したのかということとは分かりません。全くの謎です。この時代にフランシスコ・ザビエルが日本にやってきます。ヨーロッパでは、プロテスタント教会が生まれてカソリック教会が非常に難儀している時代に、新しく純粋にイエス・キリストの心に帰ろうというローマ・カソリック教会の内部改革の中で、フランシスコ・ザビエルたちがイエズス会を作り、その創始者の一人である彼自身が来てくれたのです。ザビエルの来日によって、戦国時代のインテリ層というか指導者たちが、彼を通して世界を見るということができたという意味では日本にとって大きな出来事であったと思います。

■堺と博多、そして室津

最初、イエズス会は長崎に伝道します。そして、京に宣教を進めるために、堺を根拠地にします。その堺には侘茶の創始者と言われる千利休がいましたが、この人は生粋の商人です。信長に鉄砲の弾も売っている人なのです。その友達に日比屋了慶がいました。彼は利休と同門で武野紹鴎の弟子です。武野紹鴎は堺の豪商であり、文化人としては第一人者ですね。この日比屋了慶はザビエルと出会って直ぐに家族全員で洗礼を受け、彼の家が教会になります。実は、堺の前に博多が一つ入ります。博多が今ようになったのは秀吉の「朝鮮出兵」のお陰です。それで堺の次に、今日の古田織部に関して大切なものが、「室津」という瀬戸内海に面した小さい港です。この時代には、長崎、博多、室津、そして堺を通して京に行くという海のハイウェイが通っていたのです。

■千利休と古田織部の交わり

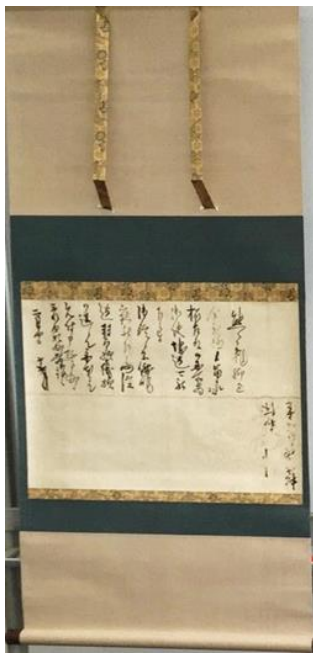
千利休との関わりは、七哲の最後に挙げられ「茶之湯無能御座候」なんですけれども、これが謎なのです。利休さんから見ても、宗旦から見てもそうだったのだろーと思われるのが古田織部なのです。千利休が秀吉から嫌われて聚楽亭から「お前は堺に帰れ」と言われて蟄居を命じられ、秀吉の家来が 2 人、それを伝えに来るのです。来たのは夕刻、日が暮れてからです。そして今、即出ろと言われるのです。この辺の気配というのは、もう利休も感じていたでしょうし、周りの人たちも感じていたでしょう。ですから、周りからは秀吉に命乞いをするようにとアドバイスがあったことは事実で、表千家にある古文書に出てきます。しかし、利休は一切、それらを拒絶しました。

時代の流れに逆らわなかったのです。そして、彼は淀の渡しから堺に向けて舟に乗り込みます。淀川は大阪から堺まで繋がっているハイウェイです。その舟が出ようとしている時に、見送りに来てくれた古田織部と細川三斎の二人に気づくのです。

■利休最後の手紙

実は今日持って来た軸は利休の真筆ではありませんが、和紙にコピーして軸に設えたものです。これが「利休最後の手紙」(写真)と呼ばれているもので、細川三斎(忠興)の家老で松井佐渡守康之という人への手紙の返礼の手紙です。古筆学者の小松茂美さんが非常に思い入れのある解説をしていますので読みます。

「わざわざの御飛脚、拝見いたしました。(松井佐渡守康之の飛脚便)誠に嬉しく存じました。富田左近将監殿と柘植左京亮殿のお二人が入来(これは秀吉の使者です)、堺に下りて蟄居せよとの厳命でございました。そこで誠に慌ただしい限りでございましたが、昨夜舟で下りました次第、ところがはしなくも淀の船着き場で、羽柴与一郎様(これは細川三斎)、古田織部様が既に私を待ち受けていただいております。土手の上にお二人の姿をお見かけした折には、びっくりいたしました。船中座す利休の周辺には警護の武士が取り巻いていた。利休は言葉発することもできない。また陸の二人も無論、深編み笠に顔を包んでの忍びの見送りである。声を掛ける術もなかった。互いに目と目で万感の思いを残しながら、舟は船着き場を離れ



ていった。船中、土手の上と断腸の思いを残しながら遠く離ればなれになったのである。利休の頬には涙が滂沱と流れていた。ふと涙を拭くと利休は筆を取り上げた。松井佐渡守康之に対する返書はかようにして船の中の波の上で認められたのである。そこもとからどうか与一様に、織部様によろしく御礼を申し述べていただきたい。と、申し添えることを忘れなかったのである。さながら名優の舞台を見るような劇的な一瞬がこの一通によってまざまざと描けているのではないか。」と。それで、この時のお礼として、古田織部に利休が茶杓を竹の贈り筒に入れて差し上げました。そして、織部の所にこの茶杓が届きます。それは利休が切腹した後かも知れませんが、彼はその竹の筒に黒漆を塗り、ここに穴を開けたのです。茶杓の竹の節とこの横に切った穴でクルスを描いたのです。これは本当に不思議な彼の行為ですね。これが利休の茶杓「泪」(写真)なのですね。



■生と死の狭間を生きた古田織部！

秀吉による「朝鮮出兵」の時に日本側の出兵基地は名護屋城でした。その城下には、全国から集められた大名たちの屋敷が造られていて、今発掘が進められている中で分かってきたことは、如何に茶の湯が盛んだったかということです。古田織部の屋敷跡はほとんど発掘が終わっていて、そこには利休の侘び茶を思わせるようなものや、これこそ古田織部だと思わせる坪庭の石組みなどが出てきています。僕は古田織部の生涯って、祈りの生涯だったと思うのですよ。しかも文化の世界に潜ってね。千利休という侘び茶の文化の中で、彼は平和を希求する武将として交渉役が上手でした。

■室津、小豆島とキリスト教

1587 年(天正 15 年)6 月に秀吉による「バテレン追放令」が出されて、高山右近や宣教師達は室津に逃れ、室津を通過して小豆島に逃れるのです。両方とも小西行長の領地でした。この時、一緒に逃れた宣教師の中にオルガンティーノというイエズス会のリーダーがいました。オルガンティーノは高山右近の信仰の師でした。ですから、小豆島にはキリシタンの足跡が今も多く残っています。

■ヴァリニャーノの下での室津会議・・・？

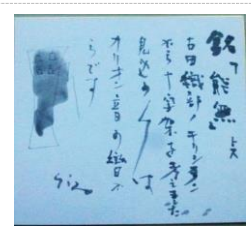
1590 年、ヴァリニャーノが「少年遣欧使」(1582-1590 年、九州のキリシタン大名の名代としてローマへ派遣された 4 人の少年を中心とした使節団)を引き連れて秀吉に謁見を申し入れますが、長崎から室津まで来たところで、12 月下旬から 2 か月に亘り留め置かれます。室津でヴァリニャーノたちは、小西行長をはじめとしたキリシタン大名や、高山右近もいたはずですが会議を開きました。ここからは僕の状況証拠から見た考えです。この室津にヴァリニャーノが留まっていた時に、古田織部も来ていただろうと思います。それと言うのも、第一回の追放の時に、オルガンティーノがリーダーで、迫害に備えていました。第二回に日本に帰ってきた時に、日本の様子が違っているとはっきりと感じた彼は、これからの日本でキリスト教をどのように宣教していくかと、表に出て死んでいく人と裏というか地中に籠もって、カタコンベが象徴するように中に入ってしまった文化を通してキリストの命を輝かせる人、そういうような役割をこの室津で宣教師たちと日本を動かしている大名たちと何か決めたのではないかと思います。表に出る人、高山右近なんかはまさにそうでして、ついには家康から国外追放されてしまうのですから宣教師並みです。古田織部はどうしたかというと、完全に秀吉の懐に入り、家康の時代になったら利休の継承者として徳川家の茶の湯の師匠となり、そういう中で大阪の陣があって、豊臣が滅びると同時に彼は殺されているのです。そこで、高橋敏夫説は、彼は室津での会議の時に、教会の祈りの中で彼はまるでキリシタンでないかのように、文化の中に、利休の侘び茶の中に入り込んで生きたのではないかと思います。だから、古田織部の燈籠が有名になったし、こういう文物が今も残っているのです。

■織部とは何者か！

これらは、織部が利休の侘び茶をいいよねって言って、こういうふうな“ひょうげた”ものを造ったのです。このお茶碗は奈良の辻村史郎さんが造ってくれた「能無」です。織部の茶碗は素直に丸く造った上でキュッと曲げているだけなのですが、長次郎



辻村史郎作「無能」



銘と茶碗の解説

の手ぐすねとの違いは轆轤を使っていることです。これらは、織部という人が何者かということを表しているのです。古田織部という人は、戦国時代の狭間の中で平和を祈り希求し、そして利休の侘び茶の継承者として平和を創ろう、平和に生きようとして「一盃から平和を」という狭間の祈りを持っていた人だったろうと思います。

古田織部という人は高橋先生のお話を伺ってもさらに深まる謎ですね。